

分担研究報告書

生物テロに関する研究

研究分担者 齋藤智也 国立感染症研究所感染症危機管理研究センター・センター長  
研究協力者 北山明子 国立感染症研究所感染症危機管理研究センター・第5室長

研究要旨

不安定な世界情勢を背景に、CBRNE テロリズム(以下、CBRNE テロ)の脅威は継続している。本研究では、世界健康安全保障行動グループ会合(GHSAG)を含む、国内外のネットワークを通じて国内外の最新の科学的・政策的知見を集約し、各国の法整備・政策・実事例の分析を行うと共に、諸外国・GHSAG 等で先進的に検討されている各種ガイドライン・対応マニュアル等を踏まえ、本邦でも活用可能な資料として整理を行う。その結果を厚生労働省に提示し、本邦での CBRNE テロに対する健康危機管理体制強化に向けた提案することを目的とする。特に本分担研究課題では、生物剤及びリスクコミュニケーションの分野についての情報収集と還元を行うことを目的とする。本年度は、世界健康安全保障行動グループ(GHSAG)バイオワーキンググループ(BioWG)及びその関連会議に参加し、国の脅威評価手法や生物剤の汚染が疑われる犯罪現場管理、原因不明疾患への対処等会議での意見交換を通じて得られた情報を共有した。また、国内でセキュリティ機関とのシナリオに生物テロを含む合同演習への参加し、助言者として準備しておくべき事項を明らかにした。

A. 研究目的

国際的なテロ活動などの国際状況を背景に、CBRNE テロリズム(以下、CBRNE テロ)の脅威は継続している。また、新型コロナウイルス感染症等の影響や健康危機管理への意識の高まりとともに、CBRNE テロに関する国際動向を適確に把握し国内施策に反映することが重要な課題である。更に、CBRNE テロで使用される危険物質についての情報収集/共有・分析・対応検討や、災害・危機管理情報等を迅速にリアルタイムに知ることができるリアルタイム危機管理情報ソリューションの利活用、サイバーテロなど従来とは異なる形態のテロリズムへの対応策についても、検討が必要である。

そこで、本研究においては、世界健康安全保障行動グループ会合(GHSAG)を含む、国内外のネットワークを通じて国内外の最新の科学的・政策的知見を集約し、各国の法整備・政策・実事例の分析を行うと共に、諸外国・GHSAG 等で先進的に検討されている各種ガイドライン・対応マ

ニュアル等を踏まえ、本邦でも活用可能な資料として整理を行う。その結果を厚生労働省に提示し、本邦での CBRNE テロに対する健康危機管理体制強化に向けた提案することを目的とする。

特に本分担研究課題では、生物剤及びリスクコミュニケーションの分野についての情報収集と還元を行うことを目的とする。

B. 研究方法

世界健康安全保障行動グループ(GHSAG)バイオワーキンググループ(BioWG)及びその関連会議に参加し、会議での意見交換、ヒアリング及び文献収集を通じて得られた情報を共有した。また、国内でシナリオに生物テロを含むセキュリティ機関との合同演習への参加に至った事例を報告した。

(倫理面への配慮)

該当しない。

### C. 研究結果

世界健康安全保障行動グループ(GHSAG) バイオワーキンググループ(BioWG)において共同議長として生物テロに関する議題の設定を行った。結果、2月の対面会議では4つの課題を議論することになり、その結果を共有した(表1)。

表1 GHSAG BioWGにおけるアジェンダ  
(令和6年2月開催)

・脅威とリスクの評価
・犯罪現場の管理
・異常疾患事例の管理
・高度隔離施設における感染症臨床管理

現在のバイオテロの脅威については、様々なシナリオや病原体が使われる可能性があり、また、AIを含む新たな技術が新たな困難を生む可能性が指摘された。そのため、予測がより困難であり、「適切なレベル」の準備が困難になっていることが指摘された。また、準備を優先すべき病原体を絞り込むことも困難であり、むしろ共通の特徴を有する病原体群で考えることがより重要ではないかとの指摘があった。

犯罪現場の管理では、司法当局と公衆衛生当局の連携が不可欠であり、合同の評価や調査、情報共有が必要であることが指摘された。また、除染や曝露者の管理、証拠収集の困難さが指摘され、対応のコンセプトの比較などが必要とされた。

異常疾患については、対処ガイドランスに異常疾患の定義や初期の疑わしい事象の検知、各当局の役割や相互の連絡方法、訓練方法等について記載が必要との指摘があった。

高度隔離施設(HLIU; High Level Isolation Units)における高度危険感染症(HCID; High

Consequence Infectious Disease)臨床管理については、HCIDやHLIUの定義は各国まちまちであることが明らかになった。

国内でのセキュリティ機関との協働については、昨年度より自衛隊、消防、警察への情報提供とアウトリーチを行ってきたところであるが、令和5年5月に陸上自衛隊・消防の合同訓練に生物テロ専門家として実働参加する機会を得て、その経験のフィードバックを行った。本合同訓練は、G7広島サミット開催前にCBRNテロ発生時の除染にかかる合同訓練として行われた。齋藤研究分担者は、現地指揮所において除染に関する助言を行う役割を担った。このような訓練への参加は初めてであったが、非常に短時間に状況を把握し、適切な判断を下す必要性を認識した。そのため、現場で使われている専門用語・短縮語や、装備品や現場で対処しうる選択肢について事前に十分に理解しておく必要があることがわかった。

### D. 考察

今後の生物テロに関する計画的対処を考えるうえで多くの示唆が得られた。特に、バイオテロに使われる病原体にどのようなものがありうるか、という点についてはしばしば議論になるが、病原体診断や医薬品の準備という観点からはある程度必要な議論ではあるが、現場対応という側面からは異なる視点で検討し、共通の要素を持つ病原体群として捉える必要があると考えられた。

現場対処の訓練参加は非常に重要な機会となった。各セキュリティ機関の想定する「現場」は異なることから、演習を通じてイメージを擦り合わせていく必要があるとともに、想定される現場についてより理解を深め、SOPや特殊な用語、装備に関する理解を深めることが重要であると考えられた。

引き続き同グループでの情報共有を継続し、生物テロ対応に関して、警察・消防との情報共

有・強固な連携を推進していく意義がある。今後もアウトリーチを継続し、消防等との図上演習に参加して関係を構築しつつ、生物テロ対処に関する合同演習の企画を検討する必要がある。

#### E. 結論

GHSAG における生物テロに関連した議論について最新の論点を紹介した。また、生物テロ現場における対処について、助言者として事前に準備しておくべき事項を明らかにした。

#### G. 研究発表

##### 1. 論文発表

該当なし

##### 2. 学会発表

北山明子,濱田優一,高橋健一郎,太田雅之,村上耕介,石原朋子,齋藤智也. 国立感染症研究所 感染症危機管理研究センターのセキュリティ部門との連携・協力について,第 29 回日本災害医学会総会・学術集会.京都.2024 年 2 月.

#### H. 知的財産権の出願・登録状況

(予定を含む。)

1. 特許取得:なし。

2. 実用新案登録 :なし。

3.その他 :なし。